東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

クアラルンプール日本人学校における国語の取り組み

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐久間,裕二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173636

クアラルンプール日本人学校における国語の取り組み

前在マレーシア日本国大使館附属クアラルンプール日本人会日本人学校教諭
茨城県立竜ヶ崎第一高等学校教諭　佐久間　裕二

キーワード：在外教育施設、マレーシア、国語教育、高校教員、オンライン学習、ビブリオバトル、百人一首

赴任校の概要（2021年4月16日現在）

学校名・日本語：在マレーシア日本国大使館附属・クアラルンプール日本人会日本人学校

学校名・現地表記：The Japanese School of Kuala Lumpur

URL：www.jskl.edu.my

児童生徒数　幼稚園　45人　小学部　419人　中学部　97人

１．　はじめに

高等学校所属教員が在外教育施設に派遣されるのは令和元年度が初めてである。高等学校所属の私が派遣を希望したきっかけは大別すると2つある。1つ目は大学在学中に2年余り中国に留学していた経験から、機会があれば海外で働いてみたいと考えていたこと。2つ目はいわゆる進学校と呼ばれる学校での学習指導経験である。私は国語を担当しているが、理解力の高い生徒が多いなか、一定数の生徒は理解が不十分なまま学習を進めてしまっている。当初は生徒の学習に対する姿勢や時間の不足であると考えていたが、自分自身の授業を再点検してみたところ、私が敷設する授業のレールが中学校でのそれに上手く連結されていないのではないかと考えるようになった。そのような状況下で派遣募集に目が留まり、国語学習の環境が十分とはいえない海外在住の中学生に、高校進学後をもイメージした授業を提供するとともに、中学生を指導することで、その経験を帰国後の高校での授業に活かすことができ、その上、自分自身の新たな挑戦が「三方よし」であると考え、応募を決意した。

２．　取り組んだ取り組み

（1）漢字の学習

JSKL（The Japanese School of Kuala Lumpur：以下JSKLと略す）の保護者からの要望で最も多かったものは漢字の定着である。茨城県の高校入試ではそれほど配点の高くない漢字であるが、全国すべての高校入試問題を調べてみると、100点満点中、20点の配点が多かった。早速漢字の小テストを始めたが、こだわった点は2つある。1つは出題と解答の工夫である。テスト範囲である学習ノートから間違いやすい字、入試で問われやすい字を自ら選び、解答にはそのポイントとなる解説をつけた。もう1つはテスト実施の曜日である。小テストを週初めの授業と週末の授業での1週間で2回とした。そのねらいは週末・平日ともに学習習慣を定着させることである。また、小テストの結果は、毎回担当学年の全ての先生に配布し、声掛けなどを依頼した。

（2）五色百人一首による源平戦

中学部では、私の赴任以前から五色百人一首を用いた源平戦の学校行事があった。大学のセンター試験では和歌が含まれる出題は多く、とりわけ筑波大学の個別試験では、過去10年以上和歌が連続して出題されている。是非とも生徒たちが日本文化としての和歌に親しむ態度を育みながら将来の学習にも役立つようにと、百人一首大会に間に合うよう、漢字テストに替えて、10月中旬以降から週1回、10問を10週かけて小テストを行った。

問題形式は文法的に重要な箇所の1句を穴埋めとした。初めのころは戸惑っていた生徒たちも、授業で百人一首を体験してからは熱心に取り組むようになり、結果として百人一首大会は大成功を収めることができた。

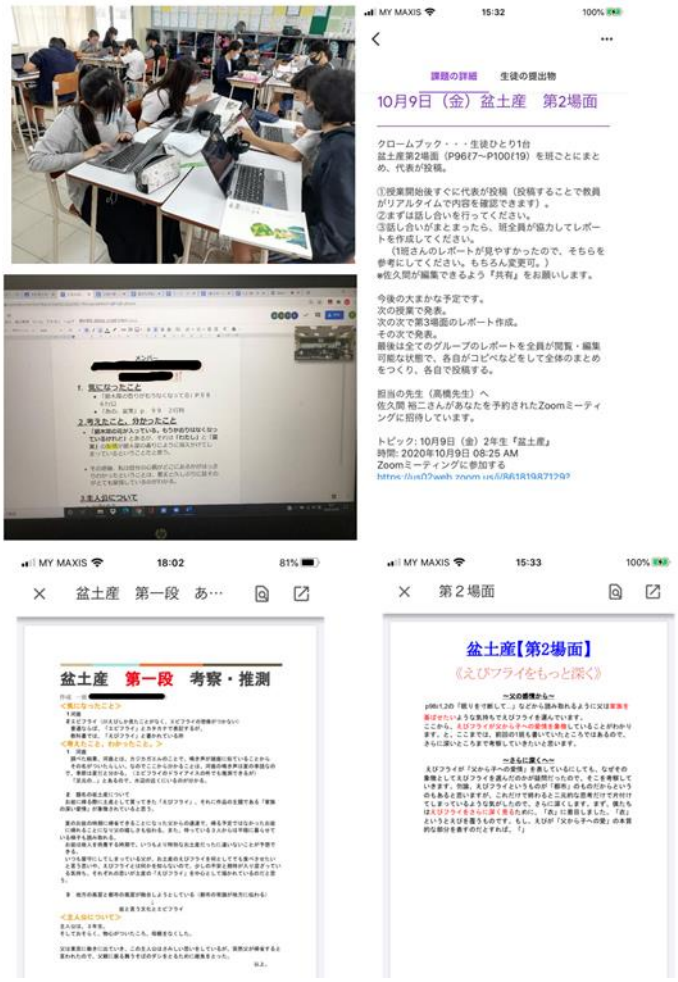
反省は小テストの出題形式である。小テストを頑張ると学校行事の大会でもっと活躍ができるという出題形式

のほうがよかったのではないかと考えている。どうしても文法事項の重要な点を出題してしまったが、「決まり字」など勝負の境目となる箇所を出題すると更に効果的であったと考える。

（3）オンライン授業への布石

2019 年末からのコロナ禍の影響はマレーシアにも多大な影響を与え、新年度を迎えても、3 月下旬からの MCO（活動制限令 Movement Control Order：以下 MCO と略す）は解除されず、JSKL は新学期からオンライン学習を余儀なくされた。この取り組みは、グローバル教師ポータルサイトに「在外教育施設におけるオンライン学習の実践について」と題した報告があるため、こちらでは簡単に紹介したい。

JSKL では、私の赴任前から、学校方針として ICT 教育に力を入れていた。四六時中猛暑である自然環境、高校教員から中学校教員という立場の変化にも慣れてきた 3 学期、オンライン授業の下地となるように、授業において生徒 1 人 1 台 Chromebook を使用し、授業に取り組んだ。オンラインでのやり取りは全て Google Classroom で行った。



対面でのオンライン授業の様子

教材はヘルマン・ヘッセの「少年の日の思い出」。一通り読解の授業を行った後、主人公を「僕」ではなく、エーミールとし、生徒たちは彼の視点から新しい物語づくりに取り組んだ。作品は匿名で公表し、生徒たち自身の投票によって最優秀賞を決める旨を伝えた。作品は Google Document に作成し、オンラインで提出。次の授業前にそれらを一覧表にし、配信。授業時に生徒はそれらを読み、一覧表と同時に配信した Google Form に、自分が気に入った作品を 3 つ選び、それぞれその理由や励ましのコメントを記入し提出。次の授業時までにそれらを集計し、順位を確定させながら、いくつかの優秀作品を選びオンラインで閲覧できるように PDF で配信した。

生徒たちの取り組みもよく、コメントも思いやり溢れるものばかりだった。生徒はもちろんのこと、私にとってもこの新たな取り組みは、後のオンライン授業の礎になった。

（4）オンライン授業

新年度以降のオンライン授業では、当初は双方向というよりは、課題を提示し、生徒の自主性に任せるスタンスであったが、MCO の延長を受け、5 月 13 日から今後の取り組みを「オンライン学習」と位置づけ、双方向の学習が始まった。私は当初から Zoom を用いた授業に取り組み、主にパワーポイントを使って一斉授業を行った。

その後もマレーシア政府からは、生徒の登校は認められず、中間テストも実施ができなかった。１学期末評価のために、生徒が納得できる客観的な評価が必要と考え、「オンライン学習」毎に Google Form にて、今日の授業評価を記述で「今日の授業で学んだ（取り組んだ）こと」「授業感想」を記述で記入させた。また、評価対象外と明示し、本日の授業の満足度を「よく理解できた」「まあまあ理解できた」「あまり理解できなかった」「全く理解できなかった」の選択肢を選ばせ（ここまでは必須）、授業についての質問や授業の改善要望などを自由に書ける記述欄も設け、当日夕方までに提出させた。

このフォームの提出があったため、50 分の授業時間の内訳は、5 分で「前時の感想の共有」、5 分で「前時の学

習の復習」。30 分で授業。10 分はフォームの記入時間及び質問タイムとした。生徒の要望として採用した小グループでのブレイクアウトセッションはオンラインだからこその良さを垣間見ることができた。

オンライン授業全体の感想としては、非常に満足できるものであった。単に双方向で授業を行うだけでなく、感想フォームとの組み合わせがよかったと自負している。授業の満足度は、ほぼ毎回 9 割以上であったが、これは毎回、次の時間の朝までに感想フォームの内容を一覧にまとめ、添付ファイルとして共有したことが功を奏したのだろう。このことによって、対面の授業以上に双方向性を高めることができたと考えている。

（5）ビブリオバトル

夏休みの宿題として、多く採用されるのは読書感想文である。確かに読む能力・書く能力の向上を求めるにはうってつけであるが、生徒に書かせておきながらその添削などの指導まで手が回らないのが実情であろう。また、単に宿題の提出が目的になってしまう生徒も多いだろう。そこで、派遣 2 年目の夏休みの宿題はお気に入りの本を決め、クラスメイトに勧めるつもりで読書をすることとした。

幸いにも対面授業が可能となっていたため、予定通り授業でビブリオバトルを取り入れた。生徒も私にとっても初めての取り組みであり、多くの生徒がその準備に戸惑っていたため、ビブリオバトル公式サイトの関連ページを授業にて印刷したものを配布し説明した。生徒はそれを参考に原稿作成を行い、その間に机間指導を行うことで、思いを文章にまとめるのが苦手な生徒にきめ細かく指導することができた。

授業時間の都合のため、ルールはミニビブリオバトルを採用した。50 分の授業時間で区切りをつけなければならないことから、最大 5 人のグループを作り、1 時間はグループでの予選とした。グループ内 1 位が決勝進出とし、1 週間後に決勝とした。工夫したことは、生徒が聞く側に回ったときの集中力の維持である。そのため、投票は単に順位決めにならないよう、自分の発表の振り返り、他者のよかった点、アドバイスの記入欄を設け、全生徒に他者が認める自分の良かった点とアドバイスをフィードバックすることができた。また、単に順位だけでなく、これらの提出物を評価に組み込めた点である。

マレーシアではこの年の年度当初より、新型コロナのため、ロックダウンなどによって 1 学期はほとんど対面授業が実施できず、オンライン授業であった。2 学期はオンラインにて授業参観を実施したため、この予選の様子を伝えることができた。また、生徒にも好評であったため、3 学期のオンライン授業の期間に、生徒会が主体となって、中学部全体でオンラインビブリオバトルが実施された。

（6）オンラインホームルーム

出口が見えない MCO でのオンライン授業は、学習への意欲を維持することが難しい生徒も一定数いるようであった。授業を欠席する生徒は朝のホームルームも欠席するケースがほとんどであったため、朝の HR と授業、それと養護教諭が隔日で行っている健康観察の提出率とを比較し、相関関係を調べてみた。こちらも先述の報告にあるため、簡単に紹介する。

当初、クラス単位で行われていた朝のホームルームは出欠確認及び健康観察がメインであったが、上述の問題から単に教員側からの関わりだけではなく、双方向性を重視して生徒にも話す場を作るようにした。毎日 1 人ずつ気になるニュースなど話題を提供してもらい、生徒同士で情報や思いを共有することによってホームルームの出席率向上につながり、授業の出席率向上にもつながったと思われる。

これらを学年で共有したことにより、2 学期後半から 3 学期にかけて朝のホームルームはクラス単位ではなく、学年単位で行い、学年の先生との関りを重視し、生徒の発言も引き出せるような工夫を行った。また、学年主任のお人柄で、朝から笑いの溢れるものとなったこともよい影響を与えたと思われる。その結果、朝の HR の出席について、ほぼ毎日全員出席が実現でき、健康観察も学年全体で喚起したことによって全員提出も格段に向上した。私が担当以外の授業でも、出席率の向上の報告を多く受けることができた。

３． 全体のまとめ

（1）「国語を教える」とは

海外での中学教員という、本来とは異なる立場で気づかされたことは、我々が生徒たちに伝えるものは「日本語」ではなく、「国語」であるということである。高校ではあまり意識していなかった教科書における教材の配列が、改めてそれに気づかせてくれた。「日本語」とは、日本独自の言語として、他国から見た「日本の言葉」という区別的な呼び方である。一方、「国語」とは、その国の母国語のことであり、その国の文化と密接なつながりをもつ「日本の言葉」である。そして、日本語の背後にある日本独自の文化や考え方をしっかりと理解させ、「国語」によって思考し、他者とコミュニケーションを取ろうとする姿勢を身につけさせることが「国語を教える」ということである。

常夏のマレーシアでは四季というものはないが、日本の教科書はこの四季と、その季節にまつわる日本人の情緒が意図的に並べられている。日本人学校の生徒の中には、一度も日本にいたことがない生徒もいる。そのような生徒に、いかにそれらを共有共感してもらえるか。もし、再度派遣されることがあるならば、このあたりを掘り下げてみたい。その経験はきっと、日本で暮らす異国の方々によりよく日本を伝えることを可能とさせるだろう。

（2）オンライン授業の可能性

全く予想をしていなかった環境の変化で、「学校での学び」は大きく変わってしまった。特に海外では生活圏が狭く、閉鎖的である。変化によって生まれる陰は日本よりも濃いものとなろう。学校におけるオンラインでの学習は、大きな可能性を秘めていると実感した。しかし、その光は強く、その光によって生まれる陰は反比例して濃くなる。オンラインでの学習は、その陰に目を向けることで本当の輝きとなるのではないだろうか。

様々な取り組みで見えた生徒の学習意欲や学力の向上は実に目をみはるものであった。それらの基盤は、生徒の頑張りが毎回きちんと評価されるという信頼関係を築き上げることが必須だと考える。この関係がダイヤモンドのカット面のように、各教科で磨きあげることが理想的であろう。そのためには各教科の横断的学習が効果的であると考えるが、今回の研究ではそこまで到達することができなかった。今後はさらにデータを集めながら、この点に対して考察を加えていきたい。